

常木 暎生 教授の退任に際して

黒 田 勇



常木暎生先生はめでたく古希を迎えられ、2016年3月をもって関西大学を退職されます。あの特徴ある笑顔とおしゃれな服装のお姿を身近に拝見できなくなること、寂しさがこみ上げてきます。

常木先生は、終戦後間もなくの1946（昭和21）年2月、北海道のお生まれで、その後お父様のお仕事の関係で福井に移られ、福井県立藤島高校を卒業後、1966（昭和41）年、都立大学（現首都大学東京）人文学部人文学科心理学専攻に入学、社会心理学を専攻し、その後、同大学大学院人文学研究科において、中村陽吉教授の指導の下、研究者としての生活を始められました。

その後、1977（昭和52）年に、当時の郵政省と電電公社傘下にある電気通信総合研究所に研究員として奉職、電気通信、社会的コミュニケーション環境が激変する中、多くの調査研究に携わりました。

そして、1983（昭和58）年常磐大学人間科学部助教授として移籍し、大学における教育者としてもスタートを切り、1988（昭和63）年に教授に昇任されましたが、「ノンバーバル・コミュニケーション論」、「コミュニケーション論特講B」、「卒業研究」などを担当し、さらに大学院担当教授としても、「コミュニケーション行動特講」などを担当され、次世代の研究者育成にも力を注がれました。そうした教育実績や学会活動から、1995（平成7）年4月に関西大学社会学部マス・コミュニケーション学専攻に、マスコミを心理学の立場から学ぶ科目や社会調査実習を担当する教授としてお迎えすることになり、それ以来、21年間にわたって、関西大学社会学部、および大学院社会学研究科において、学生の指導と自らの研究に当たってこられました。

以下では、まず、常木先生の研究を中心に振り返ります。

常木先生は、研究者としての最初の組織、電気通信総合研究所において、様々な調査研究に取り組まれました。この研究所は、メディア技術、コミュニケーション政策の基礎的な調査研究から社会に発信していく組織として郵政省によって作られ、メディアやコミュニケーションにかかわる多くの若手研究者がここでの共同研究から、一流の研究者として成長していきました。その中に常木先生もおられ、電気通信に関する一連の実験的な研究で、海外への発信もされていました。

例えば「Psychological Experiment on Videophone Communication」「Psychological Experiment on Facsimile Communication」「Psychological Experiment on Forms of Information Presentation」といった日常生活におけるメディア機器の利用形態に関する社会心理学的な実験調査報告を英文で公表されています。そうした研究の成果が評価され、

1983年には常磐大学に移られ、そこでもメディア環境の変化の中、受け手の情報行動の変化について実証的な研究と調査を続け、とりわけ、英文で公表された An Experimental Study on the Measurement of the Amount of Information (KEIO Communication Review No.9, 1988) は、日本の情報テクノロジーと日本社会の情報化が世界に知られだした時期でもあり、アメリカのメディア専門書でも引用されています。

以上のように、研究生生活の初期においては、「情報社会」「情報化」の掛け声が大いの中、人々のメディア利用行動について、その現状と変化を地道にフォローしていく調査研究に集中されていました。

関西大学に移られる前後から、しばらく研究の公表はなされていません。当時のご本人の述懐によれば、インターネットの急速な発達と普及のなかで、従来のマス・メディア利用にかかわる調査研究の継続に戸惑いつつ、後に述べるように関西大学という新しい環境の下で、「社会調査」についての学部生への基礎的教育に専念されたことによるようです。この時期は研究生生活としては充電期だったのかもしれませんが。90年代の半ばからは、毎年ヨーロッパを旅行するようになり、イタリアやフランスの食文化に触れ、またサッカーへの関心もこの時期に大きくなり、これが、2000年代になると、新たなテーマであるスポーツとメディア、食文化とメディアという研究関心への拡大とつなげていきました。

そうした新たなテーマの模索の結果、最初の成果が、「Wカップによってサッカー人気は定着したのか」(「社会学部紀要」2003年)でした。2002年のワールドカップ日韓共催大会に関して、その数年前から「メディアスポーツ研究会」に参加し、何回も韓国で現地調査を行った成果が結実しました。さらに、経政研の共同研究で「BSEとメディア」を研究テーマとされて、BSE(狂牛病)のメディア報道を調べるため、実際に英国各地を廻り、当地の研究者とも情報交換をして成果を「BSEに関する新聞報道と政府の対応」「BSE報道再考」として公表されました。この時期、初期の「メディア利用」にかかわる研究から、メディアの内容分析という手法を用いての報道姿勢の分析、さらには日本社会の文化分析へと、研究の焦点が移っていかれたのも、先の充電期の結果であるようです。さらに、このBSE研究も含めて、ヨーロッパへの度々の出張が、「食の情報化」というライフワークの端緒となり、近年の「テレビに登場する食の実態」「食雑誌の内容分析——写真篇」「食雑誌の内容分析——文字篇」などの調査研究へとつながっていったようです。

次に、教育における常木先生の貢献を振り返ります。学部教育では「マスコミと心理」「マス・コミュニケーション研究法」「マスコミ調査実習」と、社会心理学の立場からマスコミ現象をとらえる科目を担当され、さらにそのアプローチから「専門演習」「卒業研究」

も担当されました。夜間の講義を中心とする二部があった2000年代前半には、大学院も含め、同時に12コマを担当するほど、熱心に学生の指導に当たられ、いつも夜遅くまで研究室に残っておられました。また、その熱心さは、ゼミのテーマを「食の情報化」とされてからさらに輝くものとなり、三年次でもゼミ生に課した課題を調査報告書としてまとめ、さらに卒業研究においては4万字以上の論文を課すなど、さらに厳しい指導をされてきました。ただ、厳しい指導の一方で、「食の情報化」のフィールドワークとして、ゼミ生と一緒にイタリアンやフレンチレストランに出かけて指導され、学生の中でも評判の「グルメ教授」とも言われました。

大学院教育においても、「社会調査実習」において、修士論文作成に必要なにもかかわらず学部レベルの知識と技量にも欠ける留学生に対し、懇切丁寧な指導されてきたことは、別分野で論文指導をする他の教員にとっても大変な難いことでした。ちなみに、時に実習の素材として使用されていたファッション雑誌は、常木先生が個人的に30年以上収集されてきたものであり、残された私たちの今後の教育や研究に役立つ貴重な資料となっています。

さらに、経済・政治研究所の研究員としても産業セミナー、吹田市民講座においても何度も講演し、高大連携事業 Kan-dai15 セミナーに毎年科目を提供するなど、関西大学の社会貢献事業の一端も担われました。また学部運営については、2000年10月から二年間、社会学部長代理として社会学部の運営に貢献したほか、全学的な委員会としても広報委員会をはじめ各種委員会で関西大学の組織運営・発展にも貢献されました。

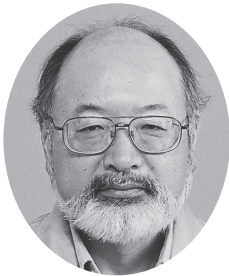
学会活動としては、日本心理学会、日本社会心理学会、日本社会学会、情報通信学会など各種の学術組織・学会に参加し、積極的な学会活動をしてこられました。主たる活動学会である日本マス・コミュニケーション学会においては、1998年から2007年の間、企画委員、企画委員長として大会運営に携わり、第28期（2001年6月から2年）と第30期（2005年6月から2年）には理事として学会運営に参画し、学会の発展に寄与してこられました。また2006年6月には関西大学社会学部において開催された日本マス・コミュニケーション学会「2006年度総会及び春季研究発表会」の大会委員長も務め、大会を大成功に導かれたことも、学会としてばかりでなく、関西大学としても誇りとするところです。

以上のように、21年間の関西大学での教授生活は、大変充実したものであったと思われます。東京にご家族を残されて単身で大阪に赴任されて以来、最初は新大阪に、そして長く天神橋商店街の中にあるマンションに住み、毎週後半は東京の自宅に戻り、また関東での非常勤を務めるなど、大変精力的に動いてこられました。これも、大学時代にアイスホ

ッケー部で鍛えた体と精神が歳を重ねてもその活動を支えておられるのでしょうか。ただ、そのような忙しい移動の生活の中でも、美味しい食べ物とお酒をこよなく愛し、大阪のレストランやバーを回り、またそれが研究にも反映されました。個人的には、大阪の多くのイタリアンやフレンチレストランにお伴し、そこで、ワインや料理についての蘊蓄を傾けられたこと、大変懐かしく思い出されます。

「定年」という制度がある以上やむを得ないところですが、残念ながら、私たちは先生のお人柄に日常的に接することはもうできません。メディア利用研究のさらなる発展をお祈りするとともに、推理小説やロック音楽の鑑賞、子どものころから得意とされていたスキーがなどを楽しむこと、そしてグルメとしてフランス料理やワインなど、悠々自適、組織に縛られない自由な時間を存分に満喫され、末永くご健勝でご活躍されることをお祈りして、お別れに際しての感謝の言葉といたします。

(文責：黒田 勇)



## 常木暎生 教授 略歴および主な研究業績

---

経	歴
---	---

---

昭和21年 2月18日	北海道生まれ	
昭和36年 4月1日	福井県立藤島高等学校	入学
昭和39年 3月31日	福井県立藤島高等学校	卒業
昭和41年 4月1日	東京都立大学人文学部人文学科心理学専攻	入学
昭和46年 3月31日	東京都立大学人文学部人文学科心理学専攻	卒業
昭和46年 4月1日	東京都立大学大学院人文科学研究科心理学専攻修士課程入学	
昭和48年 3月31日	東京都立大学大学院人文科学研究科心理学専攻修士課程修了	
昭和48年 4月1日	東京都立大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程入学	
昭和52年 3月31日	東京都立大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程所定単位修得後退学	

---

職	歴
---	---

---

昭和52年 4月1日	財団法人電気通信総合研究所専任研究員	
昭和58年 3月31日	財団法人電気通信総合研究所	退職
昭和58年 4月1日	常磐大学人間科学部助教授	
昭和63年 4月1日	常磐大学人間科学部教授	
平成7年 3月31日	常磐大学人間科学部	退職
平成7年 4月1日	関西大学社会学部教授	
平成25年 4月1日	関西大学社会学部特別契約教授	

---

## 非常勤講師歴

---

昭和60年4月1日 ～昭和60年9月30日	東京都立大学人文学部 社会心理学特講担当
平成2年4月1日 ～平成7年3月31日	茨城大学人文学部 コミュニケーション論担当
平成5年4月1日 ～平成7年3月31日	筑波大学第二群比較文化学類 情報文化基礎論担当
平成7年4月1日 ～平成8年3月31日	常磐大学人間科学部 ノンバーバル・コミュニケーション論担当、コミュニケーション論特講B担当、卒業研究担当
平成7年4月1日 ～平成19年3月31日	常磐大学大学院人間科学研究科博士課程前期課程コミュニケーション行動特講担当、コミュニケーション行動特論担当
平成8年4月1日	常磐大学人間科学部 非言語コミュニケーション論担当
平成9年4月1日 ～平成14年3月31日	常磐大学国際学部コミュニケーション・システム担当

---

## 研究業績

---

### 著書

- 「老年の人格」井上勝也、長嶋紀一編、『老年心理学』1980年、朝倉書店9
- 「社会心理学的手法」堀江湛、花井等編、『政治学の方法とアプローチ』（共著）1984年、学陽書房
- 「コミュニケーション」三井宏隆編『社会心理学—その考え方とアプローチ』1985年、小林出版
- 「社会生活の展開」磯貝芳郎、佐々木保行編、『社会生活と心理学』1987年、鷹書房
- 「社会的行動」三浦武編『心理学』1988年、学術図書出版社
- 「社会的行動の基礎」加藤義明、中里至正編『入門社会心理学』1989年、八千代出版
- 「高齢化社会」「消費者の心理」「テレビ」「電話」「マス・コミュニケーション」加藤義明編『心理学—人と社会の心理分析』1992年、八千代出版
- 「ニューメディアと新しい意味世界の登場」木下富雄、吉田民人編『記号と情報の行動科学』1984年、福村出版

### 学術論文

- 「判断者の役割取得が帰属行為に及ぼす影響について」（共著）1973年『東京都立大学人文学報』No.90
- “Psychological Experiment on Videophone Communication”, 1979年、電気通信総合研究所
- “Psychological Experiment on Facsimile Communication”, 1979年、気通信総合研究所
- “Psychological Experiment on Video-conference Communication”, 1979年、電気通信総合研究所



“Psychological Experiment on Teleconference Communication”, 1979年、電気通信総合研究所  
 “Psychological Experiment on Forms of Information Presentation”, 1979年、電気通信総合研究所  
 “Psychological Experiment on Forms of Information Presentation (PART 2)”, 1979年、気通信総合研究所  
 「情報量測定に関する一考察」1980年『RITE Review』No.4  
 「電話依存型社会の陥穽」(共著)1985年『情報通信学会誌』Vol.3 No.1  
 「人間科学の成立に向けて」1980年『常磐大学人間科学部紀要人間科学』Vol.3 No.1  
 「日本人の情報行動とその将来予測——定量的な分析を中心にして——」1987年『情報管理』Vol.29 No.11  
 「コミュニケーション論と通信サービス」1987年『常磐大学人間科学部紀要人間科学』Vol.5 No.1  
 “An Experimental Study on the Measurement of the Amount of Information”, 1988年『KEIO Communication Review』No.9  
 「情報行政と地域コミュニケーションに関する研究序説」1998年『関西大学経済・政治研究所研究叢書』第108冊「情報行政問題研究Ⅰ」  
 「地域情報化における市民——情報化とコミュニケーション行動に関する実証的研究」2000年『関西大学経済・政治研究所研究叢書』第120冊「情報行政問題研究Ⅱ」  
 「地域情報化と住民のコミュニケーションに関する研究——川越市の場合から——」2001年『関西大学社会学部紀要』第32巻第3号  
 「プレゼントの心理的影響に関する一研究——若者の贈答行動調査から——」2002年『常磐大学人間科学部紀要人間科学』19巻第2号  
 「コミュニケーションの視点に関する一考察」2002年『関西大学経済・政治研究所研究叢書』第128冊「IT革命下における制度の構築と変容」  
 「Wカップによってサッカー人気は定着したのか」2004年『関西大学社会学部紀要』第35巻第3号  
 「BSEに関する新聞報道と政府の対応」2004年『関西大学経済・政治研究所研究叢書』第136冊「進展する情報社会への政府対応」  
 「コンビニ利用に関する研究(1)」2005年『関西大学社会学部紀要』第36巻第3号  
 「視聴者にとっての政治討論番組——サンデープロジェクトと日曜討論の分析——」2006年『関西大学社会学部紀要』第37巻第3号  
 「BSE報道再考」2007年『関西大学社会学部紀要』第38巻第3号  
 「ブランド広告の特徴とイメージ」2008年『関西大学社会学部紀要』第40巻第1号  
 「Jテレビ——50年目の日常的テレビの検証」(共著)2010年『関西大学社会学部紀要』第42巻第1号  
 「テレビと郷土食」2010年『ヴェスタ』第78号  
 「食雑誌の内容分析——写真篇」2011年『関西大学社会学部紀要』第42巻第3号  
 「食雑誌の内容分析——文字編」2011年『関西大学社会学部紀要』第43巻第1号

#### その他(翻訳・辞典)

「テレコンファレンス—テレビ会議がよいかそれとも音声会議で十分か」1977年『海外電気通信』Vol.10 No.6  
 「リラックス法で効率を上げよう」1978年『DIAMONDハーバード・ビジネス』Vol.3 No.3  
 「電話の効果的な利用方法——心理学的研究から」1982年『海外電気通信』Vol.15 No.5  
 「成功したテレコンファレンスの事例研究」1986年『海外電気通信』Vol.18 No.11

「新・情報化社会論」(共訳)(Lyon, D., The Information Society, UK: Polity Press, 1988) 1990年、誠信書房

「暴かれる嘘」(共訳)(Ekman, P. Telling Lies NY: W. W. Norton & Company) 1992年、誠信書房

「テレビジョンカルチャー」(共訳)(Fiske, J. Television Culture, UK: Routledge, 1989) 1996年、粹出版社

「ニューメディアの事典」(「受け手」など10項目) 1984年、三省堂

「ニューメディア百科」(「メディア論アラカルト」) 1984年、PHP 研究所

「臨床心理学用語辞典」(「HTPテスト」など5項目) 1989年、至文堂